

物語の交通事故シーンに人はどう感情移入するか

1200543 山本 航

高知工科大学 経済・マネジメント学群

1. 研究の背景

近年、日本における社会問題の一つとして交通事故がある。交通事故における死亡者数は減少傾向にあるの、2019 年においても 3215 人が亡くなっており（警視庁, 2020）、現在も尊い命が失われている。

交通事故を少しでも減らすために、以下のように自治体や県警、企業は様々な交通安全教育を行っている。

	交通ルールを身に付ける	判断力の向上	走行技術の向上
歩行者(子供)	あやとりいひよこ(Honda)	スローライフ交通教育(日本)	あやとりいひよこ(Honda)
自転車(子供)	兵庫県学校教育(日本)	VVN交通教育ライン(オランダ)	Bikeability(イギリス)
ドライバー(一般)		香川県警動画(日本)	交通教育センター(Honda)
ドライバー(高齢者)	神奈川交通安全教育隊(日本)	動機づけ教育(日本)	JAMA教材(日本)

図 1 既存の交通安全教育の取り組み

以上は既存の取り組みをまとめて作成したものであり、以下では図 1 の中の具体例を解説する。

子供の歩行者を対象としたものは、本田技研工業株式会社が開発した「あやとりいひよこ」では基本的な交通ルールから実際に道路に出たときの注意点までを網羅しており、(本田技研工業株式会社)、前田(2008)では自己の生き方、暮らし方と結合させた総合的な交通教育である「スローライフ交通教育」の必要性を提言している。

子供の自転車運転を対象としたものとしては、兵庫県の学校教育の事例が(小竹・日野・吉田, 2012)で触れられており、カリキュラムを設定している学校は多いが学年が上がるにつれより簡便な方法になってきていることから、高校までの一貫した教育体系やそのためのカリキュラムの必要性を論じている。坪原(2015)では実践的であり質が高く、体系化されたオランダの子供向けの自転車安全教育「VVN 交通教育ライン」を評価しており、金(2017)ではイギリスで国が支援するプロ

グラム「Bikeability」によって知識と技術を総合的に習得できることが紹介されている。

成人した一般ドライバー向けには香川県警は判断力を高めることを軸に数多くの動画を作成して Web サイトに公開することで、誰でも気軽に教材に触れられる工夫をしている(香川県警, 2013)。本田技研工業株式会社が運営している「交通教育センター」では、企業としての豊富なノウハウを活かして運転技術の向上プログラムをオーダーメイドで行っている(本田技研工業株式会社)。

高齢ドライバーを対象としたものでは、神奈川県警が受講する高齢者の身体能力に合わせて交通事故を防ぐための出張教育を神奈川交通安全教育隊として行っている(神奈川県警察)。鈴木(2013)では参加型交通安全教育の必要性和具体例を述べており、高齢者に対する「動機づけ」の重要性を明らかにした。一般社団法人日本自動車工業会(JAMA)は高齢ドライバーが自身で内省しながら安全な運転技術の習得を目指す教材を開発している(一般社団法人日本自動車工業会)。

2. 目的

このようにして現在の交通安全教育は知識と技術の向上を重要視して行われているが、それらは教育を受ける人々に対してそこで得た能力を実際に発揮するメカニズムまでは必ずしも明確に意識されておらず、画一的な教育で全員が行動を変えるとは言い難い。

そこで本研究では、交通安全意識を喚起し得る物語教材を用いてインタビューを行い、以下の二つのクエスチョンを設定する。

Q1 物語教材を読んだ人が実生活において読んだ経験を活かすケースがあるのか？

Q2 そうした事例がある場合、どのようなプロセスで教材の内容が実生活で意識として蘇るか？

3. 研究方法

3.1 データ収集

本研究では、高知工科大学の学生を被験者の対象とした。被験者に交通安全意識を喚起し得る物語教材をに読んでもらい、読み終えてから1週間以内にインタビュー調査を行った。インタビューは半構造化面接で行うこととし、主な質問内容は以下の通りである。

- ①被験者自身の人生
- ②タッチの内容、事故のシーン
- ③交通事故経験、安全への考え方

質問内容については当日まで明かさず、データは匿名で処理する。

3.2 用いる教材

今回、交通安全意識を喚起し得る物語教材として、漫画『タッチ』文庫版(小学館文庫、あだち充)の1~4巻を利用した。

『タッチ』とは双子の兄弟である上杉達也・和也と幼馴染の浅倉南の3人を主人公とし、高校野球と恋愛を主題に描かれた漫画作品である。

文庫版では4巻の中盤で弟・和也が交通事故で死去するショッキングなシーンがある。

和也は夏の甲子園予選の予選決勝の朝、試合会場の球場へ行く途中で、子供を庇ってトラックにはねられて死亡してしまう。

「ウソみたいだろ」

「死んでるんだぜ。それで…」

「たいしたキズもないのに、ただ、ちょっと打ちどころが悪かっただけで…」

「もう動かないんだぜ」

という兄・達也の言葉とともに南が和也の遺体と面会する印象的なものである。

4. 結果

- ① A氏(20歳 男性) 2018年7月17日 63分
- ② B氏(22歳 男性) 2018年10月16日 64分
- ③ C氏(21歳 男性) 2018年11月6日 60分

C氏追加インタビュー 2018年11月15日 37分

2018年11月22日 5分

以上のように3名にインタビューを行い、C氏のみタッチを読んで交通安全意識が変わっていたため二度の追加インタビューを実施した。事前情報として、C氏は自動車の運転頻度が高く、A氏とB氏は運転免許を保持しているものの運転経験が少ないことがわかっていて、また、インタビューの調査結果は全て録音し、書き起こしを行った。

5. 事例

5.1 A氏とB氏の事例

交通事故より亡くなる事実の方が印象が強く、達也の心情を中心に読んでいた。二人とも交通安全には気を付けるタイプであり、車を運転しないことからそれ以上の意識の変化はなかった。

A氏は兄弟で比較されてきたことを思い出しながら、B氏は一人っ子でいいこと仲が良かったことから第三者的な視点で物語を読み進めていた。

山本：交通安全に対してどうして気持ちが変わらなかったか？

A：普段から、事故とかに対してはある程度気を遣っているつもりなので、読んだからといってさらに気を遣ってもな…という感じで。それに、作品は作品、現実には現実という感じで、そういう考え方が自分の中にあるんで。

A氏、B氏共に現実世界と物語の事故が繋がらず、教材としての読み方は出来ていなかった。

5.2 C氏の事例

C氏は他の二人とは違った発言があった。

山本：街中に出たときにタッチで出てきた交通事故とか、亡くなるシーンが頭をよぎったことはありましたか？

C：あります。今日来る途中、信号で止まっている時とか事故のシーンや前後のシーンを思い出したりとか。タッチの4巻の事故のシーンが僕にとって結構インパクトがあったというか、記憶に残る、残りやすい場面だったからだと思います。

A氏、B氏とは違って交通安全意識に変化があるため、C氏に関して詳しく分析する必要があると考えた。分析を行う準備として、安全意識が変わるまでの物語を作成した。

6. C氏の物語

C氏は高校の頃に駐車場の交通整理の係や、事故の多い香川県出身で交通マナーについてよく言われていたことから、安全意識が高かった。大学祭の役員になり、自分に向いていると思った警備の仕事を希望した彼は、大変な思いをした。10人規模を指揮する高校の係より大規模になり、先生の指示もないため先を見て考えることや自分で判断することが必要になっていた。

そうして迎えた大学祭を無事にやりとげ、やって良かったという達成感を感じていた。しかし当日に友人が信号のある交差点で事故に遭っていたことから信号を見る度に意識するなど交通安全に敏感になっていた。その状態が継続している中で被験者を引き受けた。

タッチを読んだ彼は、作品の中で身近な人が亡くなることに衝撃を感じた。それを警備の仕事で自分が中心になって考える経験にインパクトがあったことと照らし合わせて考えた。学祭後すぐに読んだことで、短い期間で交通事故に対して考えるキッカケが続いた。読んだ後、物語の続きが気になると共に交通マナーを気をつけようと考えた。

彼は他人とは違って特殊な経験をしていると語った。インタビューで交通事故について聞かれたのも、こうした彼の背景を知って聞いているのかとも考え、自立的に安全について考えるようになった彼はインタビュー自体も良い経験として捉えていた。

7. 仮説

物語教材を読んだ後に教材の内容が活かされ、蘇るまでのプロセスについて、C氏の語りをもとに以下のように仮説を立てた。

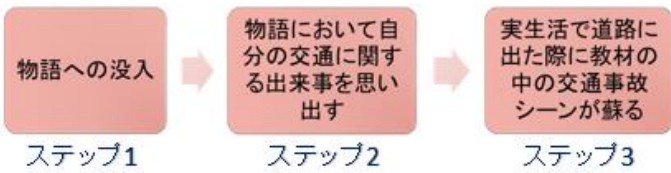


図 2 交通安全教材の内容が実生活で蘇るまでの仮説

この三段階のモデルを確かめるために、検証を行う。具体的には、

- 分析① C氏がステップ1の通過したことを確認する
 - 分析② C氏がステップ2と3を通過したことを確認する
 - 分析③ C氏はなぜステップ1⇒2⇒3へ移れたか検証する
- 以上の3つである。

8. 分析

8.1 C氏の分析①

ステップ1である物語への没入を確かめるために、(石井, 2018)より感動体験とライフストーリーの関連表を分析の枠組みとして用いる。石井(2018)では物語を読んで感動する際に新しい考え方を発見していることを示しており、関連表のカテゴリーに該当するデータが多いことが物語への没入を意味すると位置づける。

本当の自分の姿を見つける(20)	先を行く登場人物に憧れ、自分を寄せていく(7)	特定のキャラクターの能力に憧れる(2) 特定のキャラクターの生き方・信念に憧れる(4)
	これまでの自分に重なる部分を見つける(9)	生き方に共感する(3)
		共につらい経験をし、感情移入する(4)
		状況を身近に感じる(2)
		自分の過去の感情がラベル付けされる(1)
	今の自分が肯定され勇気をもらう(2)	
	納得する新しい考え方を見つけ取り入れる(2)	

図 3 感動体験とライフストーリーの関連(石井, 2018)

括弧内は(石井, 2018)にて分析した際に該当したデータ数を示す。

C氏の具体的な発言を図3のカテゴリーに分類し、記載する。

“特定のキャラクターの能力に憧れる” →文武両道出来ている和也に憧れ
“特定のキャラクターの生き方・信念に憧れる” →和也の思いを引き継いで達也に甲子園に行ってほしい
“生き方に共感する” →達也が近い存在、人に譲る性格が似てる
“共につらい経験をし、感情移入する” →身近な人が急に亡くなる衝撃
“状況を身近に感じる” →事故のシーンが頭によぎる
“自分の感情がラベル付けされる” →言及なし
“今の自分が肯定され勇気をもらう” →言及なし
“納得する新しい考え方を見つけ取り入れる” →研究のお手伝いのつもりが自分の意識を見つめ直すきっかけに、自立的に考える

C氏は8つのカテゴリーのうち6つに該当する発言をしており、タッチを読んだ際に感動体験があり、物語への没入をしていたと言える。

8.2 C氏の分析②

ステップ2、ステップ3の通過を検証するためにそれぞれに対応する発言をインタビューの書き起こしより抽出する。
ステップ2…物語において自分の交通に関する出来事を思い出す

C：地元（香川）の交通マナーであったり、つい最近まで大学祭の警備交通とかの役目をしていたので、今の時期、この時期に読んだからこそ交通について読んでも最中思い出したり、思うことがあったと思います。

ステップ3…実生活で道路に出た際に教材の中の交通事故シーンが蘇る

C：（タッチのシーンが頭によぎったか）あります。今日来る途中、信号で止まっている時とか事故のシーンや前後のシーンを思い出したりとか。

この二つの発言よりステップ1、2の通過を確認した。

8.3 C氏の分析③

ステップ1⇒2⇒3への移行を検証するためにライフストーリー研究を用いる。ライフストーリー研究とは、人々が生きていく過程、経験プロセスを物語る行為と語られた物語についての研究であり、二つ以上の事象や出来事を結びつけることを重視する(やまだようこ, 2006)。

ライフストーリー研究の手法を用いることでインタビューから交通安全教材と被験者の日常生活を結びつけ、ステップ1からステップ2、ステップ2からステップ3へと移れたか分析する。

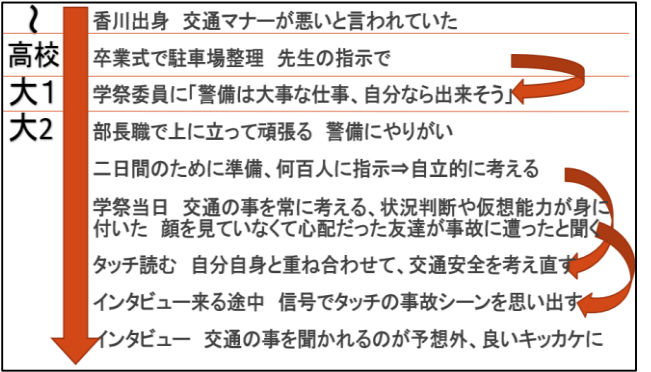


図4 C氏のライフストーリー

図4の中の矢印は支点の出来事があったからこそ終点の出来事が起こったという繋がりを示している。

ステップ1から2への移行について、タッチを読んだのが大学祭で交通警備の仕事をしてから約2週間後であり、交通について自立的に考えていた直後であった。また、その期間に友人が事故に遭っていたことから交通事故に敏感になっており、自身の事例を思い出した。

ステップ2から3への移行について、タッチを読んだ際に自分自身の経験と重ね合わせて交通マナーについて見つめ直しており、安全意識が継続していたためインタビューに来る道中の信号で止まっている時に物語の事故シーンを思い出した。

以上により、三段階のモデルが確かであることが示唆された。

9. 結論

目的にて提示した二つのクエスチョンに対するアンサーは以下の通りである。

A1 読んだ後に読み手自身の交通安全について見つめ直したり、交差点で物語のシーンを思い出したりするといった事例は確かに存在した。

A2 そうした事例を思い出すプロセスは以下の通りである。

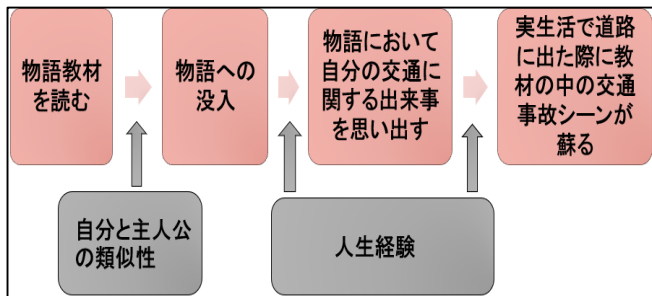


図5 交通安全教材の内容が実生活で蘇るプロセス

教材を読んでから内容を思い出すまでの過程には4つの段階がある。図5の中の横向き矢印は移行するにあたっての時間・順序を示すものである。「自分と主人公の類似性」と「人生経験」から伸びる縦向き矢印は次のステップに移るために必要であり、プロセスを円滑に進めるための促進剤の効果を示す。

これによって、交通安全に関する物語教材を読み、その内容を活かそうと思って予定通り活かした人のプロセスを明らかにすることができた。

10. 今後の課題

今回の分析をもとに、教材を読み終えた後も日常的に交通安全意識が継続したり、実際の行動を変えたりするために最適な教材の内容を提案できる可能性がある。

また、本研究での事例は、物語教材の内容を活かそうと思って予定通り活かしたものであったが、内容が意図せず急に蘇った事例を探し、分析することでも有意義な結果が得られると考える。

参考文献

1. やまだようこ. (2006). 人生を記録すること・物語ること. システム／制御／情報 2006年50巻1号 p. 33-37.
2. 一般社団法人日本自動車工業会. 高齢ドライバーのための交通安全教育プログラム. 参照先: JAMA ホームページ: http://www.jama.or.jp/safe/safety_elderly/index.html
3. 金利昭. (2017). 自転車交通安全教育の新潮流. 自動車交通研究 環境と政策 2017 p. 20-21.
4. 警視庁. (2020). 令和元年中の交通事故死者数について. 警視庁 交通局交通企画課 広報資料 令和2年1月6日 修正版.
5. 香川県警. (2013). 交通安全教育動画. 参照先: 交通事故情報提供システム: <https://kagawa-jiko.jp/movie/playlist/>
6. 小竹雄介, 日野泰雄, 吉田長裕. (2012). 児童生徒の自転車利用意識と交通安全教育の課題に関する調査研究. 土木学会論文集 D3 (土木計画学), Vol. 68, No. 5 (土木計画学研究・論文集第29巻), I_1185-I_1191.
7. 神奈川県警察. 神奈川県警察交通安全教育隊. 参照先: 神奈川県警察ホームページ: <https://www.police.pref.kanagawa.jp/mes/mesf0221.htm>
8. 石井悠紀子. (2018). 感動体験が個人のライフストーリーに与える影響—物語を読む体験に着目して—. 環状心理学研究 2018年26巻 Supplement号 p. os01.
9. 前田敏章. (2008). 「スローライフ交通教育」の意義と教育現場での実践事例. 交通権 2008年2008巻25号 p. 73-87.
10. 坪原紳二. (2015). オランダの小学校における交通安全教育の実態—学校教育における位置づけとその背景、及

び体系化への動き-。公益社団法人日本都市計画学会
都市計画論文集 2015 年 50 巻 1 号 p. 89-100.

11. 本田技研工業株式会社. Honda の交通安全. 参照先:
Honda ホームページ:
<https://www.honda.co.jp/safetyinfo/>
12. 鈴木春男. (2013). 高齢ドライバーに対する交通安全の
動機づけ ―交通社会学視点―. 国際交通安全学会誌
VOL. 35、No. 3 p. 194-201.